1．沿　革

古　代　「古語拾遺」によると，天富命が阿波斎（忌）部を率い東国に赴き，麻・穀を栽培させた。このとき良質の麻が生育したところを総の国といい，阿波斎部が居住したところを安房と名づけたという。後に都に近いところを上つ総，遠い所を下つ総といった。こうして安房，上総，下総の三国が定まったのである。

大化改新以後はそれぞれの国には国府が置かれ，その所在地は安房国府（安房郡三芳村）上総国府（市原市）下総国府（市川市国府台）であった。そこには蝦夷経営の要地として軍団が設けられ駅の制度も整えていた。そして奈良時代にはこの三国にそれぞれ国分寺が建立され地方文化の中心となった。

平安時代に入ると，地方政治が乱れ，平将門の乱や平忠常の乱が起こり，房総の地は荒廃した。のち，忠常の子孫から千葉氏や上総氏が台頭し，活躍した。

中　世　源頼朝が鎌倉に幕府を開くことに先立って千葉常胤，上総広常は功があり房総に大きな勢力を占めた。のち，室町，戦国時代となり中央政権の争奪戦や関東管領の対立抗戦の中に巻きこまれた。

近　世　豊臣秀吉が天下を統一し関東の地を徳川家康に与え，次いで家康が江戸に幕府を開くと，房総の地はおひざ元として重要であるため幕府は天領，旗本領や佐倉藩をはじめ譜代の小藩を配置した。初期には9藩，幕末には16藩，明治初年には23藩であった。

近　代　明治初年からの目まぐるしい行政変遷の後，同4年11月，安房4郡と上総9郡をもって木更津県，下総9郡をもって印旛県，下総3郡と常陸6郡をもって新治県が成立。同6年6月木更津県と印旛県を合併し，千葉県が成立。県庁を千葉町に置いた。

現　代　戦後，昭和27年3月，「産業経済振興計画」が立案され，京葉工業地帯の造成が急ピッチで進められた。内陸工業の導入，ニュータウンの造成，新東京国際空港の開港，道路網の整備と県内は大きく変化した。

平成8年度からは，「ちば新時代5か年計画」（平成8～12年度）に基づき，県民一人ひとりの「幸せ」の実現に向けた新しい千葉県づくりを進めており、平成9年12月には東京湾アクアラインが開通し、発展の可能性が一層高まった。